

# What is a Flash Mob?

## フラッシュ モブとは 何か?

スウェーデン・ストックホルムにて行なわれた、「ピローファイト」というフラッシュモブ AFP=時事



伊藤昌亮  
Masaaki Ito

フェスティバル/トーキョー12では、メールやSNSを通じて、不特定多数の人間が街中で一斉にパフォーマンスを行なう「フラッシュモブ」に材をとった「F/Tモブ」を実施する。群衆がパフォーマンスとなり、日常空間を一変させるフラッシュモブ研究の第一人者による解説を掲載。

2003年6月17日、ニューヨーク、ヘラルド・スクエアにあるメイシーズ・デパートの絨毯売り場に突如200人近くもの一団が姿を現した。一枚の高級絨毯を取り囲み、何やら激しく論争しているらしいその様子に驚いた店員に彼らが言うには、自分たちは郊外の大きな倉庫で一緒に暮らしている、こうしていつも全員揃って買い物に出かけるのだが、今日は「みんなで乗って遊ぶ」ための「ラヴ・ラグ」を探しにきた、とのこと。あっけにとられている店員が見守るなか、その絨毯を買うかどうかについて熱心に議論が交わされたのち、投票が行なわれ、少数の賛成意見と圧倒的多数の反対意見が出されるやいなや、唐突かつ迅速に一同はその場から姿を消した。

もちろん彼らは実際に倉庫で暮らしていたわけでもなければ、「ラヴ・ラグ」なるものを本気で探しまわっていたわけでもない。実はその前週、「モブ・プロジェクト」と名乗る匿名の差出人から発信され、友人から友人へと転送されてニューヨークじゅうを駆けめぐった謎のチェーン・メールを通じて、「ニューヨーク・シティにほんの10分程度、わけのわからない群衆を生み出そうとするプロジェクト」に参加するよう呼びかけられ、面白半分でその場にやってきた見ず知らずの人々だった。そのメールの差出人の正体は、のちに本人が公表したところによれば、ビル・ワジク、『ハーバース・マガジン』誌のシニア・エディターであるという人物だった。

その夏、ワジクはニューヨーク各地でこうした「プロジェクト」を8回にわたって主催した。あるときはグランド・ハイアット・ホテルのロビーに押し掛けた250人が15秒間だけ一斉に拍手喝采してから忽然と姿を消した。あるときはタイムズ・スクエアのトイザらスに押し寄せた500人が恐竜の模型の

前で4分間ひれ伏してから跡形もなく姿を消した。またあるときはセント・パトリック大聖堂の小さな古木戸を起点に300人が長大な行列を作ってから一瞬にして姿を消した。これら一連の「プロジェクト」のまとめサイトをつくったブロガー、ショーン・サヴェージはラリー・ニーヴンのSF小説『フラッシュ・クラウド』にちなみ、こうした行動を「フラッシュモブ」と命名した。

するとその様子をネットで見て面白がったアメリカじゅうの、そして世界じゅうの人々が今度は自分たちの「プロジェクト」を各地で主催し、続々と実行するようになる。こうして「フラッシュモブ現象」が燃え広がっていった。それはアメリカ各地からヨーロッパ各地へと、さらにロシアをはじめとする旧ソ連圏、オーストラリア、中南米、アジア各地へと、さらにアフリカ大陸にまで燃え広がった。その夏のうちに、サヴェージの言葉を借りれば「南極大陸を除くすべての地域を征服してしまった」フラッシュモブは、ネット・カルチャーから生まれた新種の文化現象として定着するに至る。その翌年に刊行された『コンサイス・オックスフォード英語辞典』には、「フラッシュモブ」という語が新語として収録され、次のような「公式の」意味を与えられることになった。

インターネットや携帯電話を通じて呼びかけられた見ず知らずの人々が公共の場に集まり、わけのわからないことをしてからすぐにまた散り散りになること。

こうしてネット・カルチャーのなかに、さらに世界のポップ・カルチャーのなかに定着するに至ったフラッシュモブだが、しかしその源流に位置しているのは実はワジクの「プロ

ジェクト」ばかりではない。ロンドンのパフォーマンス・アーティスト、ベン・カミンズはやはり2003年ごろからiPodなどを利用し、「モバイル・クラビング」と称する突発的なダンス型イベントを繰り返し主催していたし、ニューヨークのパフォーマンス・アート・グループ、「インプロヴ・エヴリホエア」はすでに2002年ごろからウェブなどを活用し、「ミッション」と称する「ドッキリ系」のハプニング型イベントを立て続けに主催していた。さらに日本ではすでに2001年ごろから「2ちゃんねる」を拠点に、「ネタオフ」などと呼ばれる大規模なパフォーマンス・イベントが各地で盛んに開催されていた。

## SNSをツールとした大規模オフ会なども

このようにワジクの「プロジェクト」以外にも、21世紀を迎えるにあたってどういうわけか世界各地の都市からほぼ同時発生的に同様の活動が立ち現れてきたわけである。そこで繰り広げられるのはいずれの場合もひたすらバカバカしく、くだらなく、わけのわからない行動、無意味かつ無目的な行動である。「2ちゃんねらー」が「オフ」として提起し、インプロヴ・エヴリホエアが「ミッション」として提示し、カミンズが「クラブ」として提唱し、さらにワジクが「プロジェクト」として提案したこれら一連の活動、ネット環境の普及とともに立ち現れてきたいわば21世紀的なジャンルの集合行為としてのこうした活動に、「フラッシュモブ」という語は一つの名前を、そして一つ概念を与えることになったと言えるだろう。

その後、ネット環境は進化し、2000年代も後半になるとメールとブログの時代からSNSとユーチューブの時代へと移り変わっていく。それに伴ってフラッシュモブの内実もさまざまに揺れ動いていった。一方でそれはユーチューブ上のコンテンツを志向するものとしてスペクタクル化、エンターテインメント化し、特にアメリカをはじめとする英語圏ではカミンズの「クラブ」の流れを汲むダンス型イベント、インプロヴ・エヴリホエアの「ミッション」の流れを汲むハプニング型イベントが主流となる。他方でそれはSNS上のコミュニティを志向するものとしてムーブメント化、アクティビズム化し、特にロシアをはじめとする旧ソ連圏ではいわゆる「カラー革命」の進展に伴って、どこかしら政治的なニュアンスを伴った半デモ型、半プロテスト型のイベントが主流となる。

さらにいずれの流れの場合もその動きはグローバル化、ネットワーク化していく。世界じゅうの人々が同じ日の同じ時刻に一齐に動きを止めるという「ワールド・フリーズ・デイ」、一齐に枕叩きに興じるという「インターナショナル・ピローファイト・デイ」などのイベントがアメリカを起点に世界数十ヶ国で同時開催された一方で、「新しいリアリティのゾーンを生み出す」こと、「全世界のリアリティを一瞬にして作り変えてしまう」ことを目指すという「グローバル・フラッシュ

モブ」なるイベントがロシアを起点にやはり世界数十ヶ国で同時開催された。

## アラブの春と呼応するフラッシュモブ

こうして2000年代を通じて世界じゅうで醸成されてきたフラッシュモブ・カルチャーは、10年代を迎えるにあたってより大きな展開を迎えることになる。2011年、「カラー革命」の終着点となった地、中東から突然大きな衝撃がもたらされた。いわゆる「アラブの春」である。チュニジアやエジプトに劇的な政変をもたらすに至った一連の革命行動は、もちろんフラッシュモブとして実行されたものではない。しかしSNS上のコミュニティから呼びかけられて馳せ集まった群衆が祝祭的な、ときにカーニヴァルまがいのお祭り騒ぎを繰り広げ、その様子をユーチューブ上のコンテンツとして確かめ合いながら世界じゅうに発信していくというそのスタイルは、まぎれもなく2000年代を通じてフラッシュモブ・カルチャーのなかで確立されたものだった。実際、チュニジアやエジプトでのいわゆる「フェイスブック革命」の起点となったとされるモルドヴァでの「ツイッター革命」、さらにベラルーシでの「ライブジャーナル革命」なるものはいずれの場合も、もとはといえば一連のフラッシュモブとして企画され、実施されたものだった。

ニューヨークのメイシーズ・デパートから生まれたフラッシュモブは、今やこうして世界を揺るがしかねないほどのポテンシャルを持つものにまでなっている。21世紀的なジャンルの集合行為としてのフラッシュモブは、そのバカバカしさ、くだらなさ、わけのわからなさをむしろその原動力としつつ、その無意味さと無目的さのなかに立ち返ることからあらためて新たな意味と目的を形づくっていくための一つの力、それによってこの世紀を形づくっていくための巨大な集合力となりうるのかもしれない。

### 伊藤昌亮

1961年12月生まれ。愛知淑徳大学メディアプロデューサー学部准教授。東京外国語大学外国語学部卒業、東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。著書に『フラッシュモブズ』(NTT出版、2011)など。

### F/Tモブ

ジェローム・ベル、井手茂太、KENTARO!!、白神ももこ、小野寺修二

10月27日～11月25日(毎週土曜、日曜日)

於：池袋西口公園ほか

<http://www.festival-tokyo.jp/mob/>

F/T12会期中、毎週末に異なるアーティストを企画者としたフラッシュモブが展開される。参加者は、事前にウェブで公開されている振付を覚えて会場に集う。池袋の都市空間を占拠し、日常を一変させるユーモアのあるパフォーマンスが繰り広げられる。